

時 の 間

— Confessiones XI —

小 浜 善 信

『告白』第七卷のいわゆる神体験の記述に典型的に示される「外から内へ」とい⁽¹⁾う方法は、第十卷の「記憶論」を経て、第十一卷の「時間論」においても見られるのではなからうか。アウグスティヌスは時間の本質を問い求めつつ最終的に魂の作用に還り、この作用自体がまた「分散」であることを指摘する。時間のいわゆる「主観化」⁽³⁾とは、アウグスティヌスの場合、単に時間が主観的なものか否かという問題ではなく、内がどんなに外にまきこまれたものであるかを「外から内へ還る」という作業を通じてかえって明るみへ出す「魂の訓練」である⁽⁴⁾。そのことによって自己の意志の方向を見定めようとする意志的行為であり、自己の存在根拠へ還ろうとするという意味ではむしろ「脱-主観(ex-tendere)」⁽⁵⁾を目指した行為である。この「主観化=脱-主観」化の行為のプロセスとして時間論を考察する。そのために「時の間(ま)」の意味の検討が主題となろう。

I 時空的思考

アウグスティヌスは『告白』第十一卷で、永遠と時間のそれぞれの固有性及び両者の関係を述べたのち、⁽⁶⁾「はじめに神は天地を創り給うた」⁽⁷⁾という創世記巻頭の記事に対する異論を反駁する。その異論とは、「天地を創造する以前、神は何をしていたか」⁽⁸⁾というマニ教徒のそれであった。アウグスティヌスによれば結局この異論そのものが間違った問であるということになる。神が天地即ち世界を創ったということは、同時に時間をも創ったということであり、「世界は時間において創られたのではなくて、時間とともに創られた」⁽⁹⁾ということである。そうすると、世界を創造する以前 (antequam) というような時間のことばを以て異論を唱えるということ自体がそもそも出て来るものでない。なぜなら、そこにおいて世界が創られると思われて

いる時間が、神の創造の場合、当然既に排除されているからである。

しかし問題はなぜマニ教的問が出てくるのかということである。「はじめに」(in principio)⁽¹⁰⁾と聞くと我々はどうしても時間的「はじめ」を考えるという抜き難い習慣をもっている。丁度我々が「永遠」(aeternitas)ということばを聞くとき、時間に時間をいわば悪無限的に継ぎ重ね、そして限りない時間を漠然と永遠と想像する場合のように。しかしどんなに重ねられても時間は所詮時間に過ぎず永遠ではない。同様に、創造における「はじめ」は時間的はじめではない。両者は全く次元を異にして理解されなければならない。更にマニ教的思考は、「天地を創り給うた」ということばの中に、天地の中に天地が創られたという想像を行っている。既に実在する天地即ち世界の中に何かを創るというのは人間的行為であり神の行為ではない。人間的行為が成立する前提条件としての「場」即ち世界そのものを創ったということ(11)を創造論は言うのである。

回心翌年の『カトリック教会の習俗とマニ教徒の習俗』によって、以後約十五年の永きに亘る対マニ教論争を開始したアウグスティヌスは、『告白』においても随所にマニ教反駁を行っている。『告白』第七巻で彼が壮年時代を回顧しつつ述べるところによれば、当時彼は、神を空間的に外へ外へとひろがり、しかもどこにも限定づけられていない無限の存在者と思考していた⁽¹²⁾。上の異論の出处は正に、かつてアウグスティヌス自身がとらわれていたこの思考法そのものにあつた。より大きくひろがる空間を想像し、それ以上大きなひろがりの想像できないところで無限空間という概念をもち出す。「より以前」に延びひろがる時間を想像しそれ以上ひろがりの想像できないものを永遠と錯覚する。しかし空間にはどんなに拡大して考えてみてもやはりその外が考えられるし、時間もどんなに延長してみてもそれ以前が考えられる⁽¹³⁾。従って神を時空的に考える限り決して真の無限・真の永遠には至りえない。

II 時と時間

1 可変性と時間

時間において永遠・「はじめ」を想像するという習慣は aeternitas-principium の真の理解へは導かないとしても、単にそれを誤謬だと言うだけでは問題は片づかない⁽¹⁴⁾。時間はそれと気づかれないほどに我々に身近かであることを示している。では

一体時間 (tempus) とは何なのか。ものの本質とはそれなくしては或るものがありえないようなそのことであるとすれば、時間の本質は可変性・移行性ということであろう。⁽¹⁵⁾アウグスティヌスが『告白』第十一卷第1章～13章を受けて「時間の本質への問」を提出したのちに強調するのはこのことである。しかもアウグスティヌスにとってこの可変性とは単なる物体の場所的運動のことではない。場所的運動の場合、運動物体はどこまでも視覚的・空間的世界に残っている。ここでIに述べたアウグスティヌスの創造論解釈を想起すべきであろう。アウグスティヌスにとっては時間がいわば絶対時間のように被造的存在者と別にあつて、時間の流れと個物の運動とが別であるという思考、従つて時間の「中に」個物があるというような思考は徹底して排除されている。時間が過ぎ去ってなくなるということは個物がなくなるということであり、時間がやってくるとは個物が生成するということである。予め言うておこならば、アリストテレスが時間を視覚的運動の世界に結びつけて考察するの⁽¹⁷⁾に対して、アウグスティヌスは時間を「音響」に即して分析する。なるほど場所的運動も音響も物理現象としては同じであろうが、視覚的・場所的運動体は世界に残存し、しかも運動体がそこを運動した場所も残る。しかし音は全く消え去る。この端的に消滅するものを時間分析のモデルにする。

以上のことからまた、アウグスティヌスが同・第十四章で時間を「過去・現在・未来」としてとらえ、他の仕方例えば単なる一次元直線とか単に等質的瞬間の積量として考えていないことにも格別の意味のあることが分るだろう。過去は文字通り過ぎ去ってもはやないものであり、未来はまだこないものであり、現在はないものの方へ移り去ってなくなってゆくがゆえにのみあると言われるものなのである。

2 時と「時の間」

時間が変化し移行するということは、とりもなおさず個物が非存在 (non esse) へ向っている (tendere) ということにほかならない。では、ないもの・なくなってゆくものについて我々はどうして語りうるのか。例えば我々は「長い」とか「短い」とか時間について語るではないか。今問題になっているのは物体や距離の長短ではなくて時間の長短のことである。これが第十五章以下の問題である。我々の魂 (anima) は時の間 (mora temporis) を感知し測り比較する (sentire, metiri et comparare)。⁽¹⁸⁾しかし過去は既になく未来もまだない。現在はあると言われるにしてもひろがり

もたない。なぜなら、もしひろがりをもつとすればその幾分かは過去であろうし幾分かは未来に属するだろうからである。従って時間にはひろがりは認められない。しかし我々の魂は時の間を感知し測る。ここでは時の間と時とを一応区別する必要があるのではなかろうか。ラテン語では時も「時の間」即ち時間も *tempus* で表わされる。アウグスティヌスが『告白』第十一卷第十五章以下の時間論以外のところで *tempus* という語を使う場合、それは可変性・移行性とほぼ同義の時間を念頭においているように思われる。これは広義における *tempus* であり、「時(とき)」という日本語にほぼ該当するだろう。そしてこれが意識され語られる場合に、特にその長短が語られる場合に、狭義の *tempus* 即ち時の間(ま)＝時間が問題になると思われる。

このように考えると、アウグスティヌスにおいては、時の間即ち時間は人間にとって特別の意味をもってくる。単に流れ変化する時に即するだけではなくて、正に時間を感じ測りそして比較する。これは或る意味で、ないもの・なくなってゆくものを保持し、人間のこの世の生の営み (*vita*) を可能にする基本的な要件であると言えよう。もし時の間を感じ測ることなくただ時の流れるままに流れるだけであるならば、人間的な営みはありえないだろう。アリストテレスが時間を魂と関係づけたのも「数」つまり運動・変化が知覚されその持続が「数えられた数」となるという場面においてであった。⁽¹⁹⁾しかしそこでは時の間即ち時間が人間の生にとって特別の意味をもつものとして考えられていたわけではない。

3 時間の所在と時の間

では一体時間はどのようにしてどこにあるのか。確かに過去はもはやなく未来はまだないのである。しかし過去を語り未来を予言する人々がいるではないか。これはどうして可能なのか。全くないものであればそれについて語ることはできないだろう。このことを調べてみると、過去・未来は心象・しるしとして現存する。およそ存在するものは全て現在として存在する。⁽²⁰⁾こうしてアウグスティヌスは次のように言っている。「厳密な意味では過去・現在・未来という三つの時間があるとも言えない。三つの時間がある。過去についての現在、現在についての現在、未来についての現在。実際この三つは何か魂のうちにあるものである。魂以外のどこにも見出すことができない。過去についての現在とは記憶であり、現在についての現在と

は直視であり、未来についての現在とは予期である。⁽²¹⁾」

しかし時間がこのような仕方では魂 (anima) の中にあるにしてもそれだけでは時の間即ち時間を感じ測り比較しそしてその長さを語るという事実はまだ説明しきれない。なぜなら、過去・未来の心象・しるしは記憶・予期として現在において魂のなかにあるとしても、前提によって現在はひろがりをもたないのであるから。従って、我々が時の長さについて語るのには、魂のなかに上述の三つの時間があってはじめて可能なのだとしても、一体何を測り比較するのかという問題、あるいはむしろ、我々が時間を測るといふとき、我々が測るものは一体何なのかという問題は依然として残されたままである。勿論時の間あるいは時の長さを測るのである。しかし問題は、その「間(ま)」とは何なのかということである。

4 時間と運動

もし物体の運動が時間そのものであるとすれば、我々は運動を測ることによって時間を測ることになるだろう。しかしそうすると運動の種類があるだけそれだけの時間があるということになり、これは不都合であろう。だから時間は物体の運動ではなく、むしろ物体の運動をそれによって測る尺度——それが時間である。アウグスティヌスは、しかし更に、時間そのものをも測るのではないかと自問する。我々は運動を一種の尺度としての時間によって測る。しかしまた時間をも測る。この場合の時間を測るとは、尺度としての時間によって対象としての時間を測るということではない。通常我々が「時間を測る」と言うとき、実はそれは時間で「運動を測る」ということではないだろうか。然るにアウグスティヌスが「時間を測る」と言うときのこの時間とは、むしろ尺度としての時間例えば運動を測るところの時計時間が、それによって可能になるところのもう一つ根源の時間のことではなかろうか。もしそうでなければアウグスティヌスの問、即ち時間を測る場合に何によって何を測るのかという問は意味がないだろう。⁽²²⁾ 時計例えば水時計によって時間を測るのだというような答えをアウグスティヌスが求めているわけではないのだから。従って、その問によって、我々がそれで運動を測る時間そのものがそもそもどうして可能になるのかと問われていると解さなければならないだろう。

5 時間と音

アウグスティヌスは第二十七章で視覚的世界から聴覚の世界へ入ってゆく。即ち

音響を詩歌に即して分析しながら時間考察を行っている。響き去った音は既になく、これから響こうとする音もまだない。そして現在響いている音にはひろがりはない。更にも、音がどれだけのひろがりにおいて響いたかを言うことはできない。その言えるのは、響きははじめを記憶し響き終るのを確認してからである。先立つ第二十四章では、物体の運動も動きのはじまりと終りとを知りえないならば、どれだけの時間が経ったかを言えないと述べ、これに続けて、物体の部分がここからそこへ行く場所のあいだを明確にするすことができる場合、その運動のかかった時間を言い表わすことができる、と言っている。発端と終末とを何らかの仕方でも明確にするすこと、これが時間を、時の長さを語ることを可能にする。物体運動即ち視覚的世界における運動の場合は、運動体が運動する場所は失われていない。だから我々は場所に運動の発端としての何らかのしるしをつけて、運動の終点を明確にしさえすれば時間を測りうる。しかしこの場合でも、場所につけられたしるしはそれが発端であるということが魂の中に記憶されているのでなければならない。ましてや音の場合、その響きははじめは外的にその痕跡が残るわけではなく、またそれがその中を響いたというような視覚の場所が測定の補助手段としてあるわけではないから、我々は魂の中にその響きははじめと終りとを確認しえなければ、どうして音を聞きながらそれが長く響いたと言うことができようか。

アウグスティヌスはこのように、時間に極めて近い性格をもったものとして音響を考えている。なぜなら音は響いている現在のそれしか聞こえないし、音そのものは外から聴覚を通してやってくるにもかかわらず、単なる物体とは違って刻一刻そのもの自体が完全に失われてゆくからである。外的なものでありながらしかもそれは魂の外に痕跡をしるすべき何らの場所をももっていないのである。物体の運動は、我々の魂を外へと誘う。しかし音は、特にリズムをもった音は我々の魂を内へと集中させる。『音楽論』第六巻に続いてこの時間論においてアウグスティヌスが詩句・音を問題分析のモデルとして使うのは偶然ではない。

物体運動においても音響においても、はじまりと終りを確認できなければそれらがどれだけ続いたかを言えないし、その持続の比較もできない。だから結局、響き終ったときに時の長さがどれだけであると言える。しかし音は空間の中にもはやない。痕跡すら認められない。残っているものは響きながら魂の中に残っていった現

在の印象 (affectio) だけである。第二十七章で、アウグスティヌスは、この残存しているものを単に心象 (imago, imagines) と言わないで affectio と言っている。affectio とは afficere された魂の「状態」であり、単に魂がもつあるいは魂のうちにある孤立した個々の imago や imagines やではない。⁽²⁴⁾ 音を聞きながらその響いた長さを言うとき、我々はこの affectio を測るのではないか。なぜなら現在するものについてしか長短を感じ測ることはできないからである。こうしてアウグスティヌスは「時間を測るとき、私は印象そのものを測るのである。それゆえ、その印象が時間であるか、それとも時間を測らないか、そのいずれかである⁽²⁵⁾」と言っている。しかしいずれにしても奇妙なことではなからうか。印象を測るとはどういうことか。印象が時間であるとはどういうことか。我々の日常言語としての「時間」は「印象」のことを表現しているのか。しかしそうだとすると印象に間(ま)があるのか。更にもし印象が時間だとすれば、時間の所在は記憶としての魂ということになるのではないか。しかも我々は時の間を感知し測るということは否定できないのではないか。

6 時間と魂の作用 (はたらき)

このような奇妙な事態を打開するために、アウグスティヌスは更に内へ入ってゆく。即ち同じ第二十七章の後半では、音よりももっと内なる沈黙の世界へ入ってゆく。物体運動は場所に刻印を残しうる。音は極めて内的なものであろうがそれでもなお外から響いてくるという性格をもっている。しかし声を出さずに歌を歌いその音の響きの長さを測るという場合、正に魂 (animus) の注視 (affectio) そのものの持続 (perduratio) を測るのである。それ以外にひろがりうるものがない。そして実は、第二十四章での、あの「運動を時間によって測る」という場合ですら、この affectio の持続の測定ということが前提されてはじめて可能になる行為なのである。例えば声を出さずに歌う場合、まず私の魂は予期作用として歌われるべき歌全体に向い (tendere), 歌いはじめた途端に歌われた部分に記憶作用として向い (tendere), こうして同時に未来・過去の両方向へひろがり (dis-tendere), 現在としての注視作用 (affectio) においてこの非空間的のひろがり⁽²⁶⁾が統一されている。アウグスティヌスは心象そのものではなく、むしろ記憶・直視・予期という魂の作用の方に注目し、作用の持続性と統一性を明らかにする。時間は過去・現在・未来別々にあるのではな

い。ましてや記憶のみで時間の生起が説明できるわけではない。過去・現在・未来は魂の持続・統一作用においてはじめて時間としての意味を得る。時の間即ち時間とは、個々の心象や、また *affectio* ではなくて、むしろそれらを保持する魂の作用（はたらき）の持続と統一において感じ測られる「もの」である。それは即ち「自己の持続と統一」である。

III 時間と分散

アウグスティヌスは魂の作用即ち「記憶・直視・予期」へ還り、長い未来とは「未来についての長い予期」⁽²⁷⁾であり、長い過去とは「過去についての長い記憶」であると言う。即ち時の間あるいは時の長さとはこのように「魂のひろがり」(*distentio animi*)⁽²⁸⁾である。しかし第二十九章ではこの魂のひろがりやを「生の分散」(*distentio vitae*)⁽²⁹⁾と言い換える。なぜか。

アウグスティヌスにおいては、神を空間的に最大のものと想像し、創造論における「はじめ」を限りない時間におけるそれのごとくに想像し、こうして有限と無限の意味及び時間と永遠との区別・関係を曖昧にする思考法は単に認識の問題としては考えられていない。そのような思考法がなぜかつてアウグスティヌスを、そして今なお I で述べたような異論を唱える人々をとらえるのか。それは正に「肉の習慣」(*consuetudo carnalis*)⁽²⁹⁾、「転倒した意志」(*voluntas perversa*)⁽³⁰⁾とアウグスティヌスが表現する、物体及び物的なもの一言で言えば「外なるもの」への強い愛着——欲望 (*cupiditas*)⁽³¹⁾によるものだった。物的なものの心象とそれを形成保持するはたらき (*intentio*) とは別であることを知らず、この心象に引きずられ外へ外へと出てゆく⁽³²⁾。欲望はその充足を求めて次から次へと限りなく拡散してゆく。「去っては来たる諸事物の動きの中をあいかわらずとび回り、まだ空しい」⁽³³⁾、「過ぎ去った時間を想像しながらさまよう」⁽³⁴⁾分散した心の持ち主たちのあの異論の出处は、結局この「肉の習慣」にあった。しかもこの習慣は人間がこの世にある限り脱し切ることのできない「深淵」(*abyssus*)⁽³⁵⁾に根ざすことが、現在の自己について述べる第十巻、特に「三つの罪」の詳細な分析の中で痛感されるのである。有限と無限、時間と永遠の把握の問題は、優れて意志の向うべき方向・意志の秩序づけの問題でもあったのである⁽³⁷⁾。

こうしてアウグスティヌスは「魂のひろがり」を「生の分散」と換言し、更にこれを「超えられるべき」(ex-tendere) ものとするのではなからうか。⁽³⁸⁾なぜなら意志は⁽³⁹⁾優れて価値に関わる能力だからである。この世界は人間がいかなる価値を選択してゆくかの「試練」(temptatio)⁽⁴⁰⁾の場であり、いわば価値(善)そのものすなわち自己の存在根拠としての神の「問い」(quaestio)・「呼びかけの声」(vox vocationis)に対して尋ね応えてゆく場ではなからうか。⁽⁴¹⁾

註

- (1) *Conf.*, VII, 10, 16; VII, 17, 23; IX, 10, 23 (Bibliothèque Augustinienne.)
- (2) *ibid.*, X, 6, 9; X, 8, 12.
- (3) *ibid.*, XI, 20, 26; sunt enim haec in anima tria (i.e. praesens de praeteritis, praesens de praesentibus, praesens de futuris) quaedam et alibi ea non video,
- (4) 単に時間「意識」の問題ではなく、正に「魂」全体——生の問題。animaを「意識」と換言することは勿論許されない。
- (5) *Conf.*, XI, 29, 39.
- (6) *ibid.*, XI, 1, 1~9, 11.
- (7) *ibid.*, XI, 3, 5; In principio fecisti caelum et terram.
- (8) *ibid.*, XI, 10, 12; Quid faciebat deus, ante quam faceret caelum et terram?
- (9) *De civ. Dei*, XI, 6.
- (10) アウグスティヌスは principium を Verbum (Christus) 或いは Principium と解し、下記「創造論」解釈と併せて、In principio fecisti caelum et terram. を In Verbo fecisti omnia (universus mundus) ex nihilo simul. の意味にとる。(Conf., XI, 2, 4; 5, 7; 7, 9) アンブロシウスから学んだ聖書の比喩的解釈である。なお、*De Genesi ad litteram*. VI, 6, 9 参照。*De Genesi contra Manichaeos* 及び *De Genesi ad litteram liber imperfectus* を受けて、『告白』XI~XIIIの創世記巻頭解釈はあり、更にこれを受けて *De Genesi ad litteram*. ははじまる。
- (11) *Conf.*, XI, 5, 7.
- (12) *ibid.*, VII, 1, 1; VII, 1, 2; VII, 5, 7; V, 7, 11.
- (13) 思考の及びえないところで「無限」という概念をもち出す。これは単に思考の有限性の裏がえしにすぎない。真の無限——有限についてアウグスティヌスは「時空的」なそれではない別の意味を見出ししていた。vidi tibi debere quia sunt, et in te cuncta finita...quia tu, qui solus aeternus es, non post innumerabilia spatia temporum coepisti operari; (*ibid.*, VII, 15, 21) ここには時間に先立つ創造の思想も読みとれる。vgl. Progredi autem in extima, quid est aliud

quam intima projicere; id est, longe a se facere Deum, non locorum spatio, sed mentis affectu? (*De musica*. VI, 8, 40)

(14) *Conf.*, XI, 12, 14.

(15) alioquin jam tempus et mutatio et non vera aeternitas nec vera immortalitas. novimus..., quoniam in quantum quidque non est quod erat et est quod non erat, in tantum moritur et oritur. (*ibid.*, XI, 7, 9)

(16) *ibid.*, XI, 14, 17;...scilicet non vera dicamus tempus esse, nisi quia tendit non esse.

(17) *Phys.*, IV, (217_b29~)

(18) Videmus ergo, anima humana, utrum praesens tempus possit esse longum: datum enim tibi est sentire moras atque metiri. (*Conf.*, XI, 15, 19); sentimus intervalla temporum et comparamus sibimet... metimur etiam, quanto sit longius...(*ibid.*, XI, 16, 21); Nonne tibi confitetur anima mea confessione veridica metiri me tempora? (*ibid.*, XI, 26, 33) これらの引用文においては、時の「間」(mora, intervallum, spatium)の「感覚」(sentire-sensus)と結びつけて anima という語が使われている。またこの anima という語は「測る」metiri とも関係づけられている。しかし第二十六章の後半から第二十八章においては、anima に代えて専ら animus という語が使われる。inde mihi visum est nihil esse aliud tempus quam distentionem: sed cuius rei, nescio, et mirum, si non ipsius animi. (*ibid.*, XI, 26, 33); Insiste, anime meus, et adtende fortiter. (*ibid.*, XI, 27, 34); In te, anime meus, tempora metior. (*ibid.*, XI, 27, 36); Sed quomodo minuitur aut consumitur futurum, quod nondum est, aut quomodo crescit praeteritum, quod jam non est, nisi quia in animo, qui illud agit, tria sunt? (*ibid.*, XI, 28, 37) animus は「注意を集中する」とか魂の「はたらき」ということと関連して用いられる。記憶論・時間論としても重要な *De musica* VI. においては、例えば次のような使い方がされる。Illud in memoria invenio, hoc in eo motu animi, qui ex iis ortus est quos habet memoria. (*De musica*, VI, 11, 31); attentione in succedentem perpetuo sonum motus ille animi, qui attentione ad praeteritum et elapsum sonum cum transibat est factus, reprimitur, id est non ita remanet in memoria. (*ibid.*, VI, 8, 21); Aut enim ad aliquid par atque ad eiusmodi aliud se intendit animus cum hinc avertitur, aut ad superius, aut ad inferius. (*ibid.*, VI, 13, 37) つまり「注意を向ける」とか「魂の動き(運動)」というときに animus という語が使われる。しかもこの魂の「動き」は、他或いは外との関係によって生じる魂自身の運動である。(vgl.

Conf., X, 6, 9; 8, 15; 10, 17; 11, 18; 14, 21; 16, 25~ 及び *De Trin.*, IX) anima が「感覚」と切り離されずに使われているのに対して, animus はむしろ魂の作用, しかも意志の側面をもった作用を表示する場合に使われる。*De musica* VI, 11, 31 の引用文は phantasia と phantasma について述べられている箇所からのものであり, 例えば次のような使い方もしている。ipsos (i.e. patrem et avum) autem esse quos animus meus in phantasia vel in phantasmate tenet, dementissime dixerim. 更に, *Conf.*, XI, 26~28. にかけては, mens という語はひとことも使われていないことにも注意すべきだろう。アリストテレスとの関係では, 『自然学』第四巻で ψυχή という語が使われ, また時間が知覚されると言われる。ἄμα γὰρ κινήσεως αἰσθανόμεθα καὶ χρόνου. (*Phys.* 219a3-4) しかもここでは「運動と同時に」と言われている。アウグスティヌスの場合も「可変性」と「時間」とは不可分の関係にある。(vgl. *De musica*. VI, 11, 29) アリストテレスは更に時間を「より先・より後という観点からみられた運動の数」(*ibid.*, 219b1-2) と定義し, 数を数えるものは ψυχή καὶ ψυχῆς νοῦς であるから ψυχῆς νοῦς がなければ時間もないと言う。(ibid., 223a16-26) νοῦς はここではむしろ mens にあたり, アウグスティヌスの使う animus とは区別さるべきだろう。なお, アリストテレスは「時間は感覚される」と言うが, 他のところでは, 「感覚されないもの」の中に「時間」も含めている。時間はなるほど感覚されるが, しかし五官のいずれによってもない。勿論五官のすべてを失えば時間も感覚されないであろうが, しかし個々の感覚によるのではない。アウグスティヌスの場合の sensus も, むしろ「内官」と呼びうるものであろう。

- (19) 前註参照。 (20) *Conf.*, XI, 18, 23.
- (21) *ibid.*, XI, 20, 26; 「現在のものの現在」(praesens de praesentibus) という表現の中に, 明らかに, 変化する対象的世界(必ずしも物体の世界ではない)と魂とが「直接」していることが表現されている。なお引用文中の tempus は「時間」と訳しておく。この引用文の意味内容は, 下記6に至ってはじめて明らかになる。
- (22) metior motum corporis tempore. item ipsum tempus nonne metior? (*ibid.*, XI, 26, 33)
- (23) ipsum ergo tempus unde metior?...quid ergo metior? (*ibid.*)
- (24) vgl. *ibid.*, X, 25, 36 記憶論——感情の記憶; *De musica* VI. においても affectio という語はしばしば使われる。Affectio ergo haec aurium cum tanguntur sono, nullo modo talis est ac si non tangantur. (*De musica*. VI, 2, 3);

sicut est affectio corporis quae sanitas dicitur: (*ibid.*, VI, 5, 13) など。

- (25) ipsam (i.e. affectionem) metior, cum tempora metior. ergo aut ipsa sunt tempora, aut non tempora metior. (*Conf.*, XI, 27, 36) 最後の aut non tempora metior を「私が測るものは時間でないかである」と解する訳もあるが、ここでは「時間を測らないかである」と訳す。
- (26) *ibid.*, XI, 28, 37-38 (vgl. *De musica.* VI, 3, 4)
- (27) *ibid.* (28) *ibid.*, XI, 26, 33.
- (29) *ibid.*, VII, 17, 23. (30) *ibid.*, VII, 16, 22.
- (31) vgl. *De musica.* VI, 8, 38; quibus rebus maxime animum soleamus intendere ...? eas opinor esse quas multum amamus. *De Trin.*, X, 7, 9~8, 11.
- (32) *Conf.*, VII, 1, 2. (33) *ibid.*, XI, 11, 13.
- (34) *ibid.*, XI, 13, 15. (35) vgl. *ibid.*, X, 2, 2.
- (36) *ibid.*, X, 30, 41~
- (37) vgl. *De musica.* VI, 11, 29~13, 37. 様々の numerus について考察しながら永遠の numerus へ至る。VI, 11, 29 には aeternitas のイミテーションとしての tempus も述べられている。
- (38) 註(5)参照。
- (39) 註(18)参照。animus は優れて「意志的な魂」であり, distentio animi とはむしろ「意志的魂の分散」。
- (40) *ibid.*, X, 28, 39; numquid non temptatio est vita humana super terram sine ullo interstitio?
- (41) *ibid.*, XI, 2, 4.